

# ルワンダの虐殺から考える

(東京大学学術俯瞰講義。2007.6.19)

---

武内進一

(日本貿易振興機構アジア経済研究所)



# ルワンダ虐殺に関する映画を観たことがありますか？

---

- 「ホテル・ルワンダ」(2006年、US2005)  
(Hotel Rwanda)
- 「ルワンダの涙」(2007年、UK2006)  
(Shooting Dogs)
- その他、2007年4月には「ルワンダ映画祭」が開催。

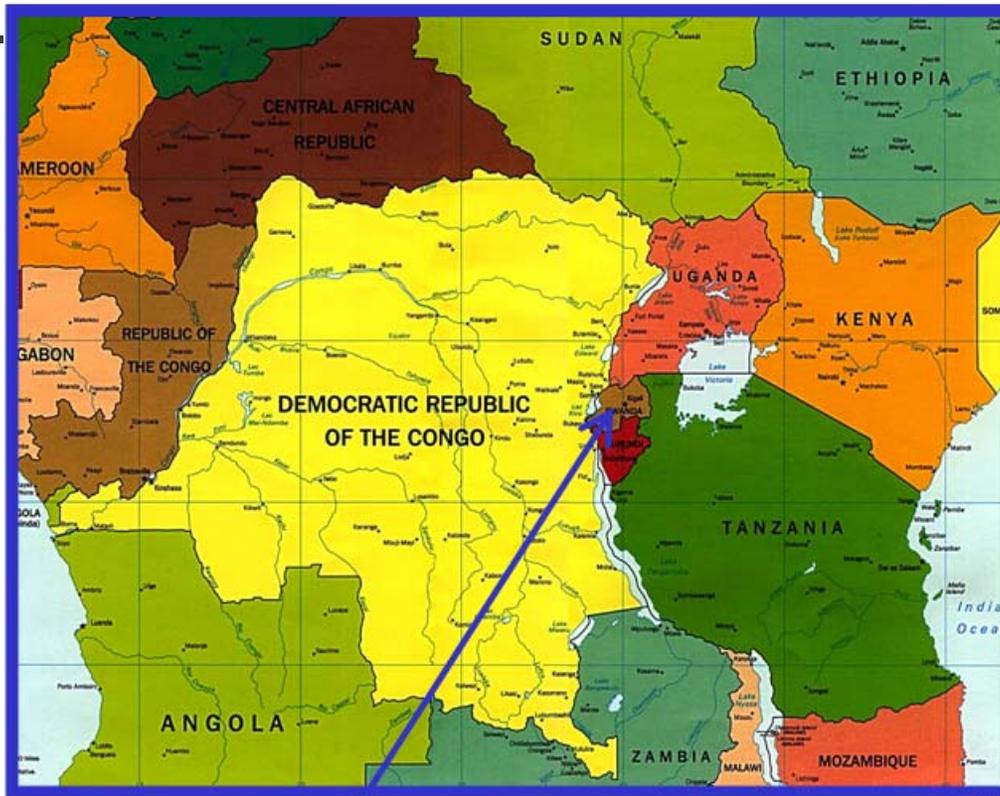


# 何が起こったんですか？

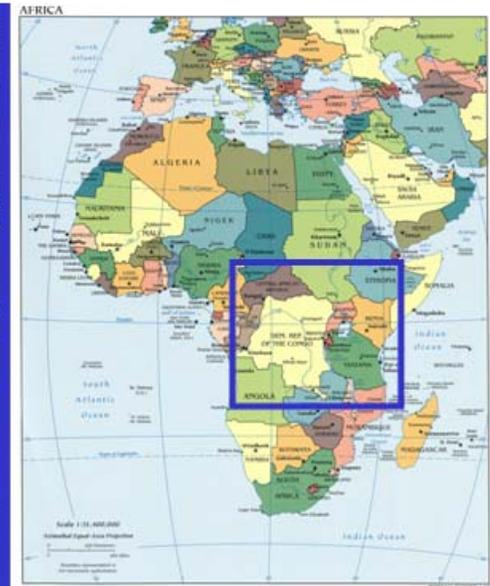
---

- 1994年4月6日、ハビヤリマナ大統領暗殺事件をきっかけに、中部アフリカのルワンダで、トウチを標的とした大量殺戮(ジェノサイド)。
- 100日足らずのうちに、50～80万人が殺害される(当時のルワンダの人口は約750万人。トウチ人口の7～8割が殺されたと見られる)。
- 展開していた国連平和維持部隊は、この事態に何もできず、事実上撤退した。

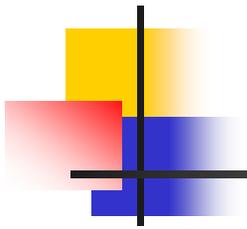
# 現代のアフリカ国家



RWANDA



(地図 Source: Central Intelligence Agency)



# どういうこと？－幾つかの疑問

---

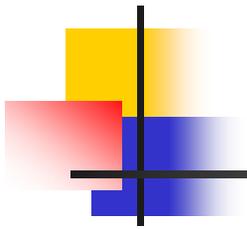
- なぜ、こんなことが起こったのか？
- なぜ、民族紛争が起こるのか？
- なぜ、アフリカで紛争が頻発するのか？



## どういう「民族紛争」だったんだらうか？

---

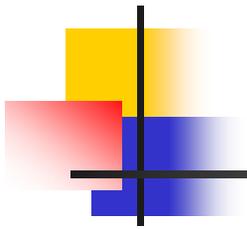
- トウチが、トウチだという理由で殺された。
  - 無差別、ジェノサイド
- でも、フトウも殺されている。
  - 首相、農相、情報相、元外相など。
  - 彼らは野党勢力で、内戦の相手(RPF:「ルワンダ愛国戦線」)との和平協定を履行しようとしていた。
  - トウチもフトウも、親RPFというレッテルを貼られて殺された。



# トウチ、フトウ、トウワ

---

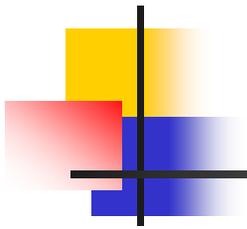
- ルワンダの人口を構成する集団。
- 人口比。トウチ(10数%)、フトウ(80数%)、トウワ(1%)
- 国民が区分されている→その理由は？
  - 言語、宗教、居住地、生業、体型
  - 歴史的に区分されてきた



# RPFとは？

---

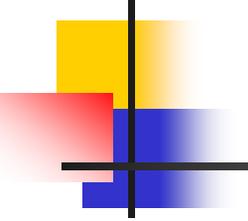
- 1990年に北隣のウガンダから侵攻した、反政府武装勢力。(90年以降、内戦状態)
- 組織の中核はトゥチ。
- 独立前後の紛争時にルワンダを追われた難民の子どもたちが中心。
- フトゥも参加。(ハビヤリマナ政権への不満)



# 独立前後の紛争とは？

---

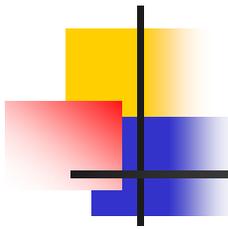
- 1959年（独立の3年前）、トウチ中心の政党（UNAR）とフトゥ中心の政党（PARMEHUTU）の支持者間の衝突を発端に、全国に紛争拡大。
- フトゥ中心の政党（PARMEHUTU）が、植民地政府の支援の下で権力を握る。トウチの難民化。



# なぜ植民地期末期に紛争が起きた？

## ■ 植民地政策の影響

- 区別と差別：曖昧だったエスニック集団間の区分を厳密化。行政幹部としてトウチだけを登用。  
→フトウ・エリートに不満醸成
- ヨーロッパの人種理論（「ハム仮説」）の影響：「アフリカに文明をもたらしたのは、ハム人種」  
「トウチはハム人種」「フトウはアフリカ土着人種」
- ヨーロッパの視点でルワンダの伝統社会を理解し、それに合わせた行政機構を作ろうとした。
- 植民地という非対称的な権力関係の下で、観念が現実に転化した。

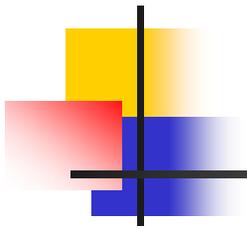


# なぜ植民地期末期に紛争が起きた？

---

## ■ 国際政治の影響

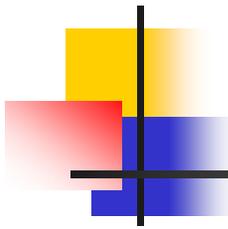
- 第二次世界大戦後の国際社会では、植民地の保有が正当化されなくなった。
- 国連：独立に向けた準備の要請。
  - 少数派の権力独占に対する批判。
- ベルギー：多数派の政治参加支援へ
  - トウチ政党とフトウ政党の衝突に際し、後者を支援  
→独立以降の政治体制を決定づける。



# 独立以降のルワンダ

---

- フトゥの政治エリートによる権力独占
- 難民帰還は許されず。
- ウガンダで育った第二世代がRPF結成。ハビヤリマナ政権に不満を持つフトゥが合流。侵攻(1990年)へ。
- ハビヤリマナ政権中枢の危機感
  - エスニックな煽動。民兵の組織化。
  - ハビヤリマナ暗殺をきっかけに虐殺指令。

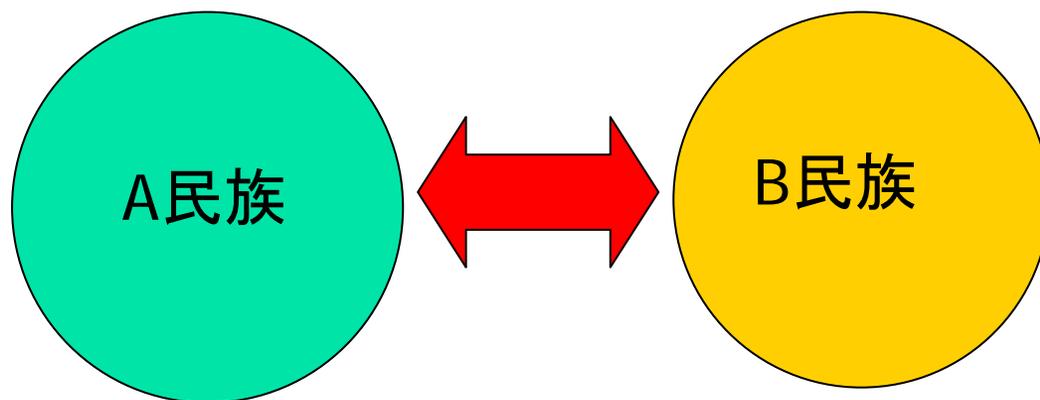


# アフリカの「民族」

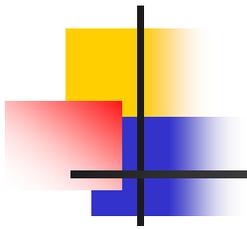
---

- 植民地期に変質している。
  - ルワンダのトゥチとフトゥ: 集団の境界線が厳密化。敵対意識の醸成。
  - ルヒャ、カレンジン(ケニア): 1930年代に大学生、1940年代に高校生が中心となって組織化。(「超民族化」現象)
- 中央政治との結びつき
  - 「民族」の境界線がどのように決まるか？

# 「民族紛争」のイメージ1



出所) 筆者作成



## 事例: コンゴ(ブラザヴィル)の紛争

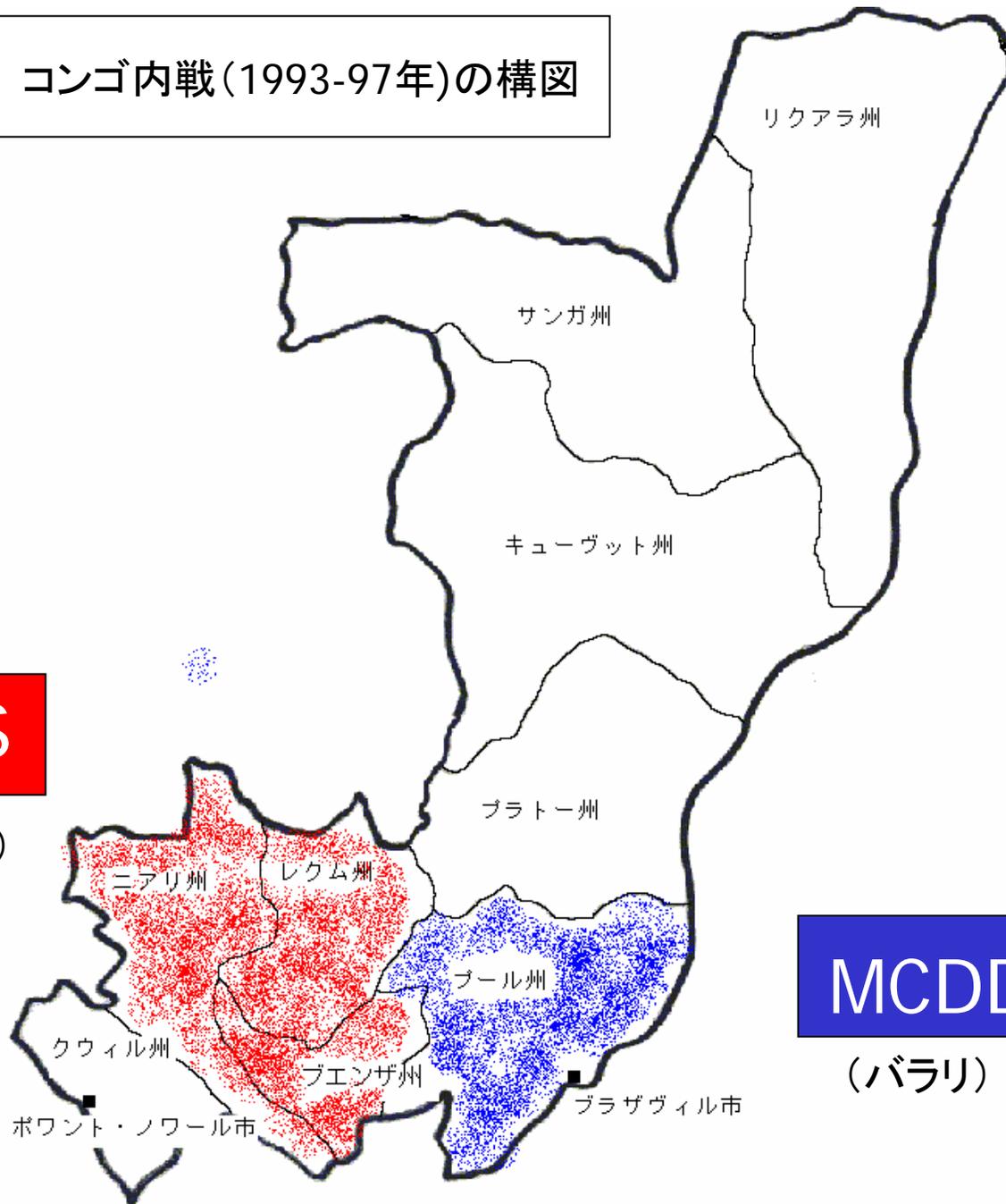
---

- 1992年の大統領選挙。新大統領選出。
- 新大統領派の政党、旧大統領派の政党。
- いずれも特定地域(部族)が支持。
- 紛争に伴い、首都で民兵の組織化。有力政治家を頂点する人的な繋がり(パトロン・クライアント・ネットワーク)。
- 民兵が主導する紛争。地方での冷淡な視線

# コンゴ内戦(1993-97年)の構図

**UPADS**

(ベンベ、ドンド)

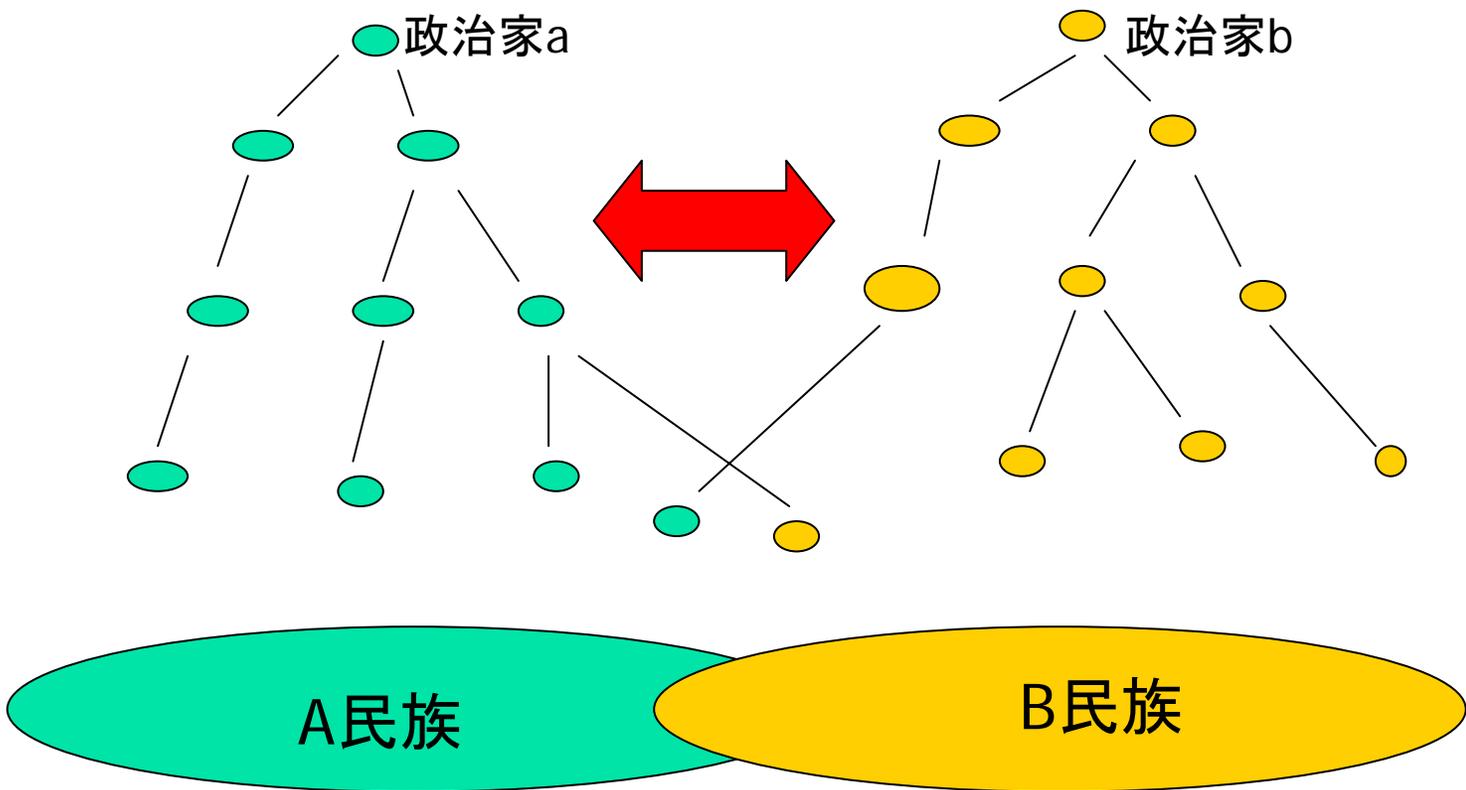


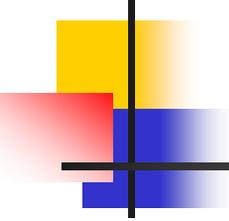
**MCDDI**

(バラリ)

出所) 筆者作成

# 「民族紛争」のイメージ2



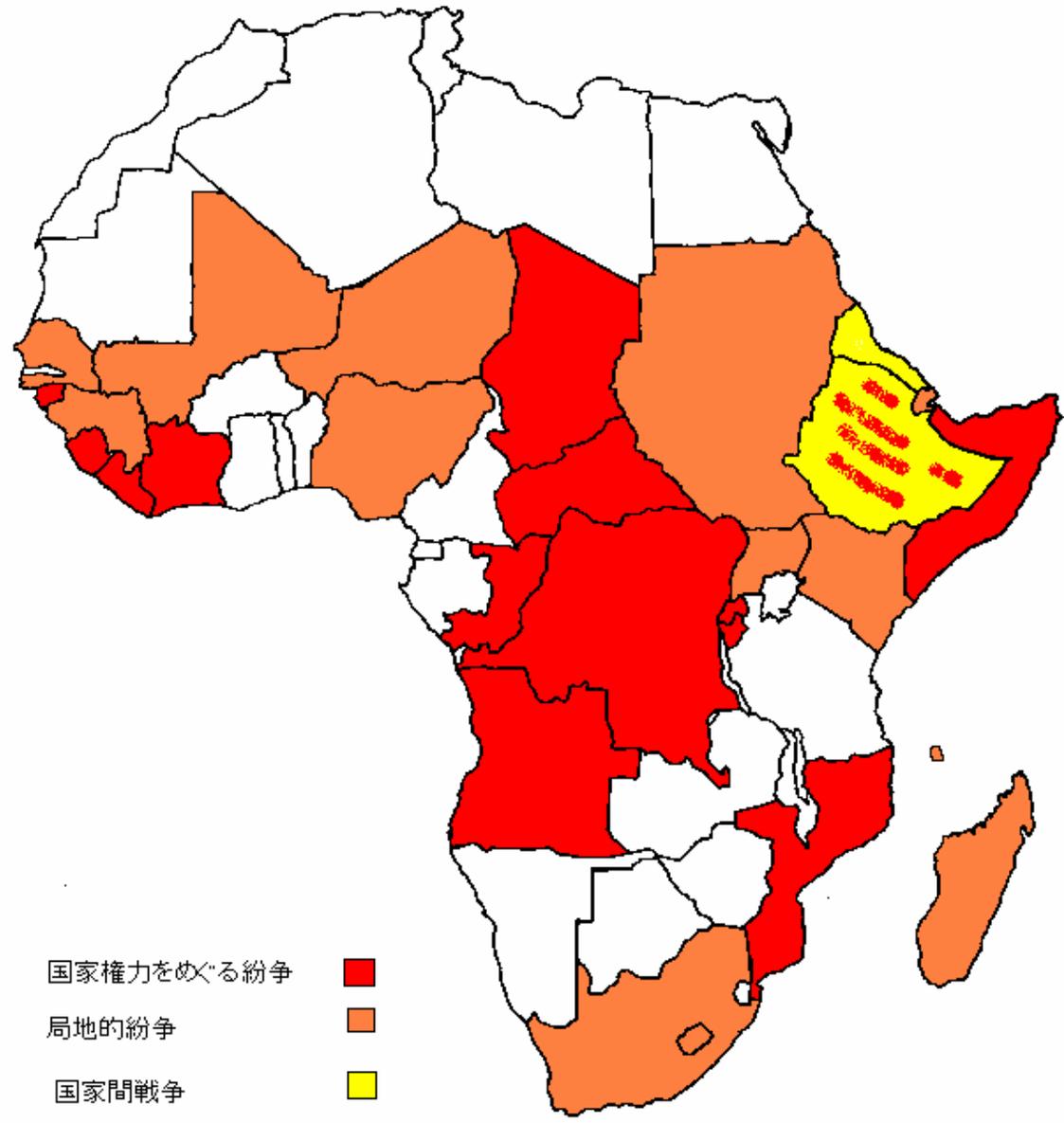
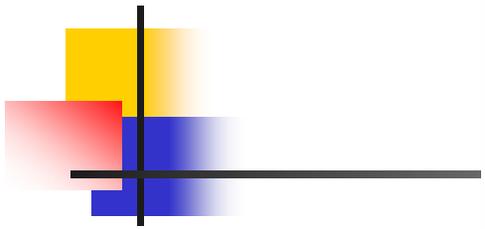


# 国家（政治）権力闘争のなかで 「民族紛争」が起こる

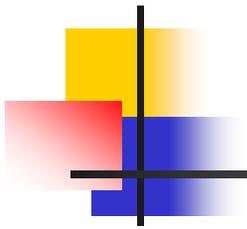
---

- 1990年代以降のアフリカ：紛争頻発
  - ルワンダ、リベリア、コンゴ（ブラザヴィル）、コンゴ（キンシャサ）、ブルンディ、ソマリア...
    - ルワンダのジェノサイドは、1990年代にアフリカで頻発した「民族紛争」の究極型。
  - 内戦、国内紛争
  - 誰が国家権力を握るか、をめぐる紛争

# ポスト冷戦期におけるサブサハラ・アフリカの紛争



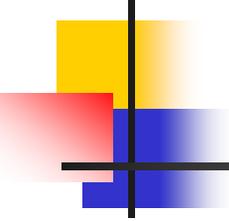
出所) 筆者作成



# アフリカの国家

---

- 紛争が起こる前、どのような国家（政治権力）であったのか？
- アフリカ研究では、国家をめぐる議論が積み重ねられてきた。
  - 家産制的な性格  
(neo-patrimonial state)
  - 植民地期統治の影響（暴力性）  
(post-colonial state)
  - 国際関係のなかの正統性  
(quasi-state)

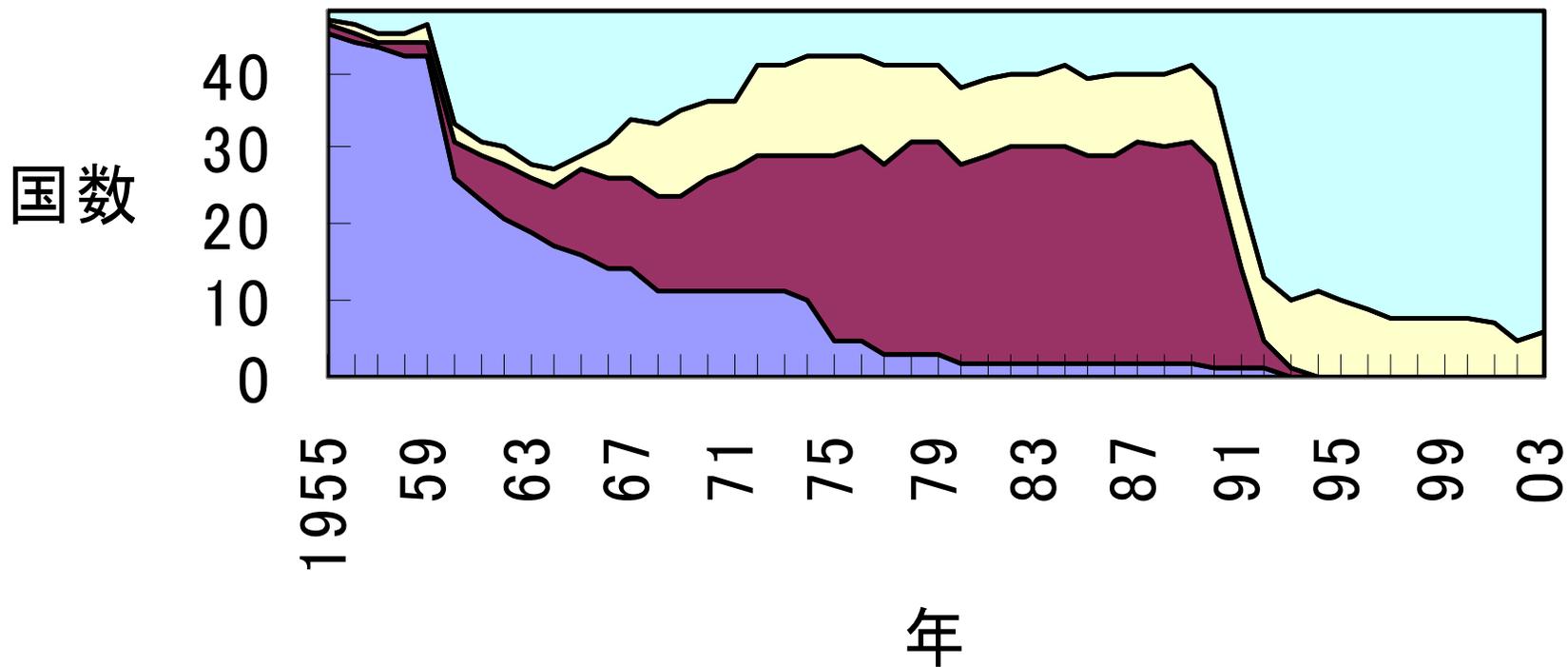


# 従来の国家のあり方(統治)に 対する衝撃

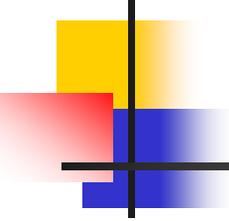
---

- 1980年代以降の変化
  - 経済危機
  - 経済自由化政策(構造調整政策)
  - 政治的自由化政策:  
冷戦終結と援助政策の変化
- いずれもパトロン・クライアント・ネットワークを脆弱化する方向へ作用

# 第1図 アフリカ諸国の政治体制の変化



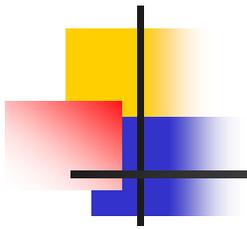
■ 植民地 ■ 一党制 □ 軍政など □ 多党制



# なぜ1990年代にアフリカで紛争が頻発したのか？

---

- 従来、アフリカ国家を内側から支えていたパトロン・クライアント・ネットワークが、衝撃を受けて脆弱化し、それによって統治が不安定化したことが重要な要因。
- 政治権力闘争のなかで、パトロン・クライアント・ネットワークを通じて「民族」が動員された。

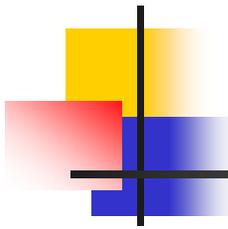


# ルワンダ虐殺のなぞ

—なぜ、かくも多くの人々が殺戮に動員されたのか—

---

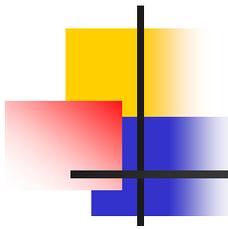
- 民族間の憎悪
  - Ex.ラジオ。しかし、否定される傾向。
- 貧困、利得
  - 土地、財産を奪えるから。
- RPFへの恐怖感
  - 自分の土地、財産が奪われる。
- 上位権力への恐怖感
  - 様々なハラスメントが予想される。



# ジェノサイド研究

---

- なぜ「普通の人々」が殺戮に参加したのか？
  - アレント『イェルサレムのアイヒマン—悪の陳腐さについての報告』
  - ミルグラム『服従の心理—アイヒマン実験』(権威への服従)
  - ゴールドハーゲン: Daniel J. Goldhagen, *Hiter's Willing Executioners: Ordinary Germans and the Holocuast*. (民族憎悪)
  - ブラウニング: 『普通の人びと—ホロコーストと第101警察予備大隊』(仲間意識)



# おわりにーもし関心を持ったら

---

- 駒場にはいい先生がたくさんいます。
  - 国際関係論、アフリカ研究、ジェノサイド研究、平和構築論
- アジア経済研究所のウェブサイトも見てください。（「開発」問題との接近）  
(<http://www.ide.go.jp/Japanese/>)  
図書館にも来て下さい。